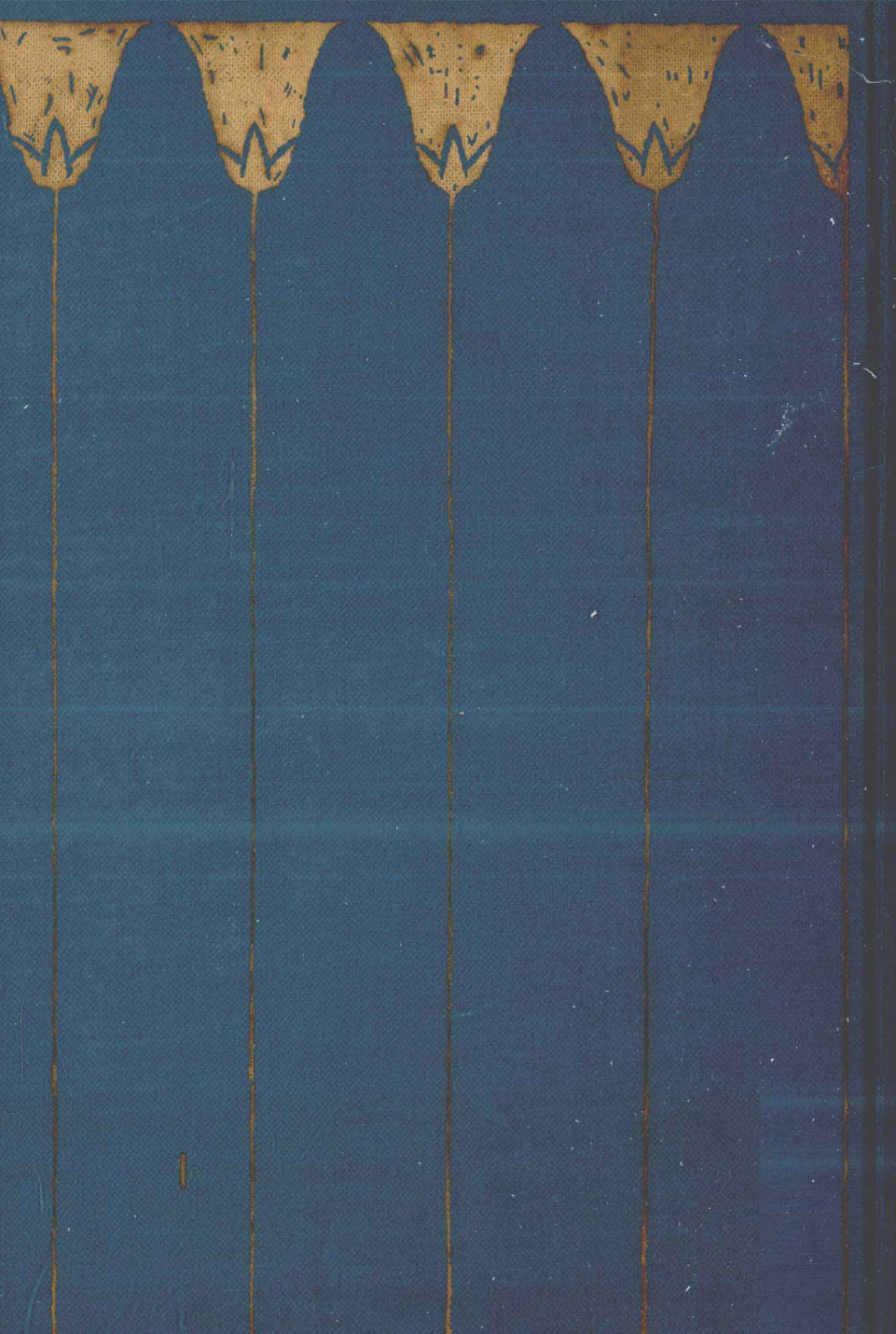




森 鷗 外

現代日本文学館

I

小林秀雄 編集

文藝春秋

現代日本文学館¹

森 鷗外

昭和四十二年十二月一日第一刷

著 者 森 鷗 外

発行者 上 林 吾 郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)一二一一

振替東京七八七四三

印刷 凸版印刷

製本 凸版製本

定価 四八〇円

Printed in Japan

本全集の本文は現代表記にいたしました

目次

森鷗外伝 小島政二郎 3

雁 25

舞姫 93

花子 108

カズイスチカ 113

妄想 121

かのように 133

阿部一族 152

護持院原の敵討 178

山椒大夫 199

魚玄機 221

じいさんばあさん 231

高瀬舟 237

寒山拾得 246

都甲太兵衛 254

渋江拙斎 262

注解 410

解説 458

年譜 465

挿画 福田豊四郎「雁」「高瀬舟」

木下孝則「舞姫」

斎藤 清「阿部一族」「護持院原の敵討」「渋江拙斎」

橋本明治「山椒大夫」

加藤栄三「魚玄機」

望月春江「じいさんばあさん」

森鷗外伝

小島政二郎

私が初めて先生の「即興詩人」を読んで恍惚として魅了されたのは、中学の何年生のころのことだったろう。

それ以来、この年になるまで私は先生の小説の魅力から一日も解き放されたことがない。

「即興詩人」よりも前に、先生には「舞姫」「うたかたの記」「文づかい」の作がある。この清新な三つの作品で、先生はたちまち新進作家として文壇に認められた。先生三十九歳の一月と八月と、三十歳の一月のことであった。無駄な作を一つも書かず、一作ですぐ認められた例はそう多くはあるまい。

ツワイグの「バルザック」を読むと、バルザックがどうして一人前の作家になったか、彼の精神の発展史が手に取るように分かって面白い。ところが、私の勉強が足りないせい、か、鵬外の精神発展の跡がつかめない。

精神発展の跡がつかめなければ、作家の伝記としては、つまらない。私としてはそんな伝記は書く気がしない。

ところが、鵬外は漱石と違ってあまり自分のことを書いていない。「漱石全集」のように手紙がたくさん集めてあると、そこから精神発展の跡を辿るよすがもあるのだが、先生のはなはだ少ない。その上、漱石のように何もかもあからさまに書いてない。事務的なものが多い。

「日記」も一冊あるが、《天晴れて風なし》。平田内相に招かれて富士見軒に行く《霜柱例より繁し》。偕行社にて医

務局の職員四十余人に午餐を供す。馬丁が亀井伯、山県公らに贈りし物の一部を途上にて奪いしことを知る。母君、於菟と日在の別荘に行き給う。皆この種のものだ。材料にならぬ。

それでも、できるだけ先生の精神発展の跡を辿ってみよう。

先生は名作の「雁」の中で、岡田という、先生より一年下の医科大学生のことを書いていられる。先生も、岡田もよく散歩をする。

この散歩の途中で、岡田が何をするかというところ、ちょいちょい古本屋の店を覗いて歩くくらいのものであった。(中略)

岡田が古本屋を覗くのは、今の詞で云えば、文学趣味があるからであった。しかしまだ新しい小説や脚本は出ていぬし、抒情詩では子規の俳句や、鉄幹の歌の生まれぬ先であったから、誰でも唐紙に摺った花月新誌や白紙に摺った桂林一枝のような雑誌を読んで、槐南、夢香なんぞの香奩体の詩を最も気の利いた物だと思ふくらいのものであった。僕は花月新誌の愛読者であったから、記憶している。西洋小説の翻訳というものは、あの雑誌が初めて出したのである。(中略)そういう時代だから、岡田の文学趣味も漢学者が新しい世間の出来事を詩文に書いたのを、面白がって読むくらいにすぎなかったのである。

僕は人付き合いのあまりよくない性であったから、



岡外森林太郎 大正6年ごろ

学校の構内でよく逢う人にも、用事がなくては話さない。同じ下宿屋にいる学生なんぞには、帽を脱いで礼をするようなことも少なかった。それが岡田と少し心安くなったのは、古本屋が媒をしたのである。僕の散歩に歩く道筋は、岡田のようにきまっていなかったが、脚が達者で縦横に本郷から下谷、神田を掛けて歩いて、古本屋があれば足をとめて見る。そういう時に、たびたび岡田と店先で落ち合う。「よく古本屋で出くわすじゃないか」というようなことを、どっちからか言い出したのが、親しげに物を言った始めである。

そのころ神田明神前の坂を降りた曲り角に、鉤なり縁台を出して、古本を曝している店があった。そこである時僕が唐本の金瓶梅を見附けて亭主に値を問うと、七円だと云った。五円に負けてくれと云うと、

「先刻岡田さんが六円なら買うとおっしゃいましたが、おことわり申したのです」と云う。偶然僕は工面がよかったので言い値で買った。二三日たってから、岡田に逢うと、向うからこう云い出した。

「君はひどい人だね。僕がせっかく見附けておいた金瓶梅を買ってしまったじゃないか。」

「そうそう君が値を附けて折り合わなかったと、本屋が云っていたよ。君欲しいのなら譲って上げよう。」

「なに。隣だから君の読んだあとを貸してもらえばいいさ。」

僕は喜んで承諾した。こんな風で、今まで長い間壁際に住まいながら、交際せずにいた岡田と僕とは、往たり来たりするようになったのである。

先生の妹の小金井喜美子の書いた「森岡外の系族」という本を見ると、先生はよく寄席へ行かれたそうだと。《衣食には質素でも、書物はいつも出し惜しみをなさらぬのを見馴れておりました》とも書いてある。《そのころは洋書は少なく、輸入の唐本や和漢籍が多かったのです。予約出版ということがポツポツ始まったところで、よくそれに申し込みをなさいました》とも書いてある。《次のお兄さんが——》と喜美子がいっているのは、先生の弟の篤次郎のことをいうのだ。後に医学士になり、開業医になったが、三木竹二という号で劇評家として有名だった。この篤次郎が、先生が片端から予約を申し込むのを見て

「兄さん、まあ、お待ちなさい。そんなにどれもこれも申

し込みなすつても、果して信用ができるかどうか、少し様子を見てからになすつたら——」

そう言って留めると、先生は

「いや、これは俺の慰みだから、黙っていてくれ」

と、予約の申し込みをやめなかった。それほど本好きだった。事実、観潮楼を訪うと、到る処に本が溢れていた。先生の本好きは大人になってからのことではない。何で読んだか思い出せないが、まだ子供のころから、よその家の子供と遊んだり、例えば麻を揚げたり、面子遊びをしたりすることが嫌い、家の中で絵本を見たり、本を読んだりすることが好きだった。だから、物心が付いてからは本の虫だった。

「ヴィタ・セクスアリス」を読むと、先生の十五歳のころに

古賀はにやりにやり笑って僕のことを見ていたが、貞丈雑記を机の下に忍ばせるのを見て、こう云った。

「それは何の本だ。」

「貞丈雑記だ。」

「何が書いてある。」

「この辺には装束のことが書いてある。」

「そんな物を読んで何にする。」

「何にもするのではない。」

「それではつまらんじゃないか。」

「そんなら、僕なんぞがこんな学校にはいつて学問を



現存する生家と「うた日記」中の「扣鈕」を刻んだ詩碑

つまり学問をするために学問をするというのだな。」

「うむ。まあ、そうだ。」

「ふむ。君は面白い小僧だ。」

この古賀というのは、本当は賀古鶴所^{かこつと}と言ひ、先生の遺書に「余は少年の時より老死に至るまで一切秘密なく交際したる友は賀古鶴所君なり。ここに死に臨んで賀古君の一筆を煩わす」とあるその人だ。

右の文章の少し前に、貞丈雑記のことを先生はこう書いている。『そのころの貸本屋の持っていた最も高尚なものは、こんな風な随筆類で、僕のように馬琴京伝の小説を卒

するものつまらんじやないか。官員になるためとか、教師になるためとかいうわけでもあるまい。」「君は卒業しても、官員や教師にはならんのかい。」「そりゃあ、なるかも知れない。しかし、それになるために学問をするのではない。」

「それでは物を知るために学問をする、

業すると、隨筆読みになるよりほかないのである。」

夏の初めの気持のいい夕かたである。神田の通りを歩く。古本屋の前に来ると、僕は足を留めて覗く。古賀は一しよに覗く。そのころは、日本人の詩集なんぞは一冊五錢くらいで買われたものだ。柳原の取っ付きに広場がある。ここに大きな傘を開いて立てて、その下で十二三くらいな綺麗な女の子にかっぱれを踊らせている。僕は Victor Hugo の Notre Dame を読んだ時、Emeraude とかいう宝石のような名の附いた小娘のことを書いてあるのを見て、この女の子を思い出して、あの傘の下でかっぱれを踊ったような奴だろうと思った。古賀はこう云った。



父・森静男(左)と母・静子(右)

「何の子だか知らないが、ひどい目に会わせているなあ。」

「もっとひどいのは支那人だろう。赤子を四角な箱に入れて四角に太らせて見せ物にしたという話があるが、そんなこともしかねない。」

「どうしてそんな話を知っている。」

「虞初新誌にある。」

「妙なものを読んでいるなあ。面白い小僧だ。」

こんな風に古賀は面白い小僧だを連発する。

それから少し先のところに

初めて「梅曆」を又借りをして読んだころから後、漢学者の友達が出来て、「剪燈余話」を読む。「燕山外史」を読む。「情史」を読む。

同じ小説の中に

夏休みから後は、僕は下宿生活をするようになった。古賀や児島と毎晩のように寄席に行く。ひどく悪い癖が附いて、寄席へ行かないと寝付かれないようになったこともある。講釈に厭きて落語を聞く。落語に厭きて女義太夫をも聞く。寄席の帰りに腹が減って蕎麦屋にはいると、妓夫が夜鷹を大勢連れて来ていて、僕らはその百鬼夜行の姿をランプの下に見て、覚えず戦慄したこともある。

日本文学、支那文学のことはこれでおおよそ分かるが、西洋文学の漁り方については先生は何も書いていられない。

僕のノートブックの数は大辺なもので、ちょうどほかの人の倍はある。その訳は一学科ごとに二冊あって、しかもそれを皆教場に持って出て、重要なことと、ただ参考になると思うことを、聴きながら選り分けて、開いて畳ねてある二冊へ、ペンで書く。その代り、ほかの生徒のように、寄宿舎に帰ってから清書することはない。寄宿舎では、その日の講義のうちにあった術語だけを、希臘拉甸の語原を調べて、赤インキでベ

エジの縁に註しておく。教場の外での為事はほとんど

それきりである。人が術語が覚えにくくて困るとい

と、僕は可笑しくてたまらない。なぜ語原を調べずに、

器械的に覚えようとするのだと云いたくなる。

漱石が中学や高等学校で英語を教える時、プレフィク

スとサッフイクスとをまず覚えさせた。単語を覚えるの

に大変調法をしたと、後に先生の主治医になった物療の真

鍋嘉一郎から聞いた。ほぼ先生と同じ方法だった。

当時「独和字典」などなく、不便をしたという話を私は

先生から聞いたことがあった。その代り、一度覚えたドイ

ツ語、術語は忘れなかったとも語っていられた。

「ドイツ語は日本語と同じくらい楽に読める」

そう言われたのを私は覚えていた。洋行して間もなく、

地学協会でのナウマンの日本に対する誤解と悪意とに満ち

た演説を聞いて憤懣に堪えず、しかし、ナウマンの演説は

式場演説だからこれを論駁することが許されない、先生が

ジリジリしていると、会食の時、ナウマンは図に乗ってま

た日本攻撃のテーブルスピーチをした。

テーブルスピーチは反駁することは自由だ。で、先生は

この機会を捉えて、ナウマンをやつつけた。後に、ナウマ

ンが同じ主旨の日本攻撃の論文を「普通新聞」という一流

の新聞に発表するのを見て、先生は好機至れりとばかり、

反駁論を書いて同じ新聞に発表した。よほどドイツ語に熟

達していなければ、できないことだと思う。先生の「ドイ

ツ日記」を見ると、実に自由にドイツ上下の社会の男女と

交際している。中に、次のような一節がある。

飯島の去りてより、余はその旧室に移れり。架上の

洋書はすでに百七十余巻の多きに至る。鎖校以来、暫

時閑暇なり。手に従いて繙読す。その適(タノシミ)

言うべからず。邊胸決眈の文にはギリシアの大家ソフ

オクレース、オイリビデース、エスキュロスの伝奇あり。

穠麗豊蔚の文にはフランスの名匠オーネ、アレウ

イ、グレイヴィルの情史あり、ダンテの「神曲」は幽昧

にして恍惚、ギョーテの全集は宏壮にして偉大なり。

誰か来たりて余が楽しみを分かつ者ぞ。

先生の論文集「月草」の「叙」に書きつらねられている

文学者、哲学者、画家の名前を拾ってみれば、ゴンクール、

フローベル、ラマルク、ダーウイン、マンテガッツァ、ク

ラフト・エービング、クールベ、ミレエ、イブセン、ゾラ、

ハウプトマン、ステファン・ゲオルグ、マネ、ビョックリ

ン、ヴォルテール、ルソー、ストリンデルベルグ、ゾーデル

マン、シェリング、フェヒネル、テーヌ、ブランドス、

ショーペンハウエル、ハルトマン、ニイチェ、ヴント、そ

の他。

みんな読んでいるのかどうか私には分からないが、とに

かく同時代の文士の中では、格段の差がある読書家だった

ことは間違いないまい。それは坪内逍遙の没理想に対する

先生の反対論文の内容を見ても分かる。

そうは言っても、理想という言葉からして今我々の使っ

ている理想という言葉とは内容が違っている、内容は

よく分からない。「小天地想」なんて言葉も出て来て、いよいよ分からない。

後に「坪内逍遙君」という随筆の中で、先生は《そのころ坪内君は記実ということを書いて、褒貶はしないことにしていた。しかし、その記実の中に知らず知らず褒貶のまじるのは争われない。いかに公平なつもりでも神ではないからである。僕がそれを見て肝癪を起こしてあげたのが、いわゆる没理想の争論の起こりであった》と書いていられる。

そうすると、没理想というのは、作者が私情をまじえずにもっぱら記実を旨とすべきだというのが逍遙の主張で、先生はそれに反対したのだ。作者におけるインスピレーションというものは、そんなものではないというのであろう。それは、先生の「舞姫」でも、「山椒大夫」でも、「雁」でも一読されれば了解されることと思う。

II

先生は文久二年に今の島根県鹿足郡津和野町に生まれた。亀井隴岐守の領地で、四万三千石の小藩であった。《山の谷間のようなところだ。冬になると野猪が城下に出て荒れまわる。そうすると、父は竹槍を持って出掛ける。私はお母あ様と兩戸をしめて内にはいって、兩戸の節穴から、野猪の雪を蹴立てて通るのを見ていた》

森家は、先生の父静男で亀井家に仕えて十二代、代々侍医であった。先生の書いたものによると、《博士の曾祖父

に子がなかったので、世にいう取り子取り嫁で家を継いだ》博士というのは先生自身のことである。《そこで祖父は格の低い奥勤めになった。嫁に來たのは長門の豪農で、帯刀御免の家に生まれた娘で、その腹に博士の母が出來た》

これが峰子である。

《そこへ婿入りをした博士の父は、周防國の豪家の息子である》

これが後の静男であった。

《この人は医術を教えられて、藩中で肩を並べる人のないほどの技倆にはなったが、世故に疎い、名利の念の薄い人であった。それを家付きの娘たる博士の母は傍から助けて、柔に勤めもし、強く諫めもして、夫に過失のないようにしていた。この

夫婦の間を祭するに足る一つの話がある。

それは、い

わゆる長州征

伐のあった直

前のことである。博士の父

は茶が好きで、ある日茶会を催そうと



明治14年 帝大医学部卒業記念[左より2人目鷗外]

した。その時博士の母は、夫の機嫌を損ずるのを憚らず、
しいて止めさせた。こういう世の中の騒がしい時、気楽そ
うに茶の湯をしては、藩中の思わくが氣遣わしいというの
であった。父はつい二三日前に友達の何がしが茶会を催し
て、自分も呼ばれたのを例に引いて争ったが、母は固く執
って聞かなかった。すると数日の後に、その茶会を催した
何がしが、時節柄を弁えず、遊戲に耽るのは心得違いだ
というので、閉門を命ぜられた。これには博士の父もひどく
驚いたそうである。

《こういう訳で、森博士の家には、博士の祖父から博士の
母を通じて、一種の氣位の高い、冷眼に世間を見る風と、
平素実力を養っておいて、折もあつたら立身出世をしよう
という志とが伝わっていた》

《森家の旧藩主で、今から二代前の三位殿と呼ばれていた
人が、侍医の病免した時、旧藩士の中で技倆の優れた医者
を求めた。その選抜に当たったのが博士の父である》

《当時十一歳になる博士を連れて、父は東京に上った。旧
藩邸は向島小梅村にあつたので、父はその近所に借家をし
て住んだ。博士を連れて出たのは、かねて博士の藩校での
成績のいいのを見て、世話してくれようと約束した陸軍大
丞何がしの家に託するためであつた。陸軍大丞何がしは、
西周である。何代か前に森家から西家へ養子に行った者の
ある親戚であつた。《博士は藩校で漢学をするかたわら、
蘭学をしていたので、大丞の家からドイツ語を教える学校
に通い始めて間もなく、あまり骨を折らずにドイツ文を讀

むようになった》

《その翌年、津和野から博士の祖母と、母と、七歳になる
篤次郎と、四歳になるその妹とが向島へ移住した。篤次郎
が前に言つた劇評家三木竹二で、その妹が喜美子である。

喜美子には「森鷗外の系族」のほかに、ハイゼ、レルモン
トフ、アンデルセン、ドーデーなどの翻訳があり、和歌に
堪能で「泡沫千首」一巻がある。「鎌倉抄」の中の一首
「承久の元年正月末つ方銀杏もかくや落葉しにけん」

《そのころの森家の暮しがどんな物であつたかということ
は、博士の記憶している二三の事実から推することができ
る。博士の家は曾祖父の代に無財産になつた。そこへ博士
の祖母が来て、学者肌の夫を助けて、数年の後に借財を返
してしまつた。それから儉約して少しずつ貯金をした。そ
れに故郷の家蔵から諸道具までを売り払つた金を併せて、
博士の母が持つて来た。『これがせめて千円あると気が安



學生時代の鷗外と三弟潤三郎



ドイツ留学時代 左端蘭外

「かううが」と父が言ったのを、博士は記憶している。今一つは父の旧藩主から受ける月給が十五円であったというところで、それで六人の家族を養って、子供に教育をして行くのは、どのくらい苦しかったか知れない。博士の通っている本郷、板橋の進文学舎で、Webbの万国史を教科書にした時、博士は初めて書物らしい書物を読むことになったのを喜んで、父にそれを買ってもらいたいと言った。その時父が五円の札を出して、「これは俺の月給の三分の一じゃがな」と言って、意味ありげに顔を見たのを、博士は記憶している。そう言われるまで博士は、教科書が父の資力に相応に高い書物だとは悟っていなかったのである。『博士は学校でいつも首席を占めているくせに、しんねりむつりした性の子であった。これに反して弟の篤次郎は人並はずれて敏捷であった。学校の成績はこの子もいい。

二人が小さい時、父が二つある菓子をつつ二人にやると、弟は先きに自分のを食ってしまつて、博士のをくれという。博士は「それは無理だ」と言つてやらない。弟は泣く。そこへ父が出て、「弟を泣かせるということがあるか」と言つて、博士の菓子を弟にやらせようとする。すると母が来て、賞罰を明らかにしなくてはいかぬと言つて、泣く弟を連れて逃げる。こういうことがたびたびあった。この家庭では父が情を代表し、母が理を代表し、父が子供をあまやかし、母がそれを戒めるといふ工合であつた。『どうも博士のむつりしたのは父の遺伝らしく、弟の敏捷なのは母の遺伝らしい。それに父は自分に似ぬ篤次郎を愛し、母はその兄の博士を庇護していた』

『少し大きくなると、篤次郎は兄の学問には服しながら、その世馴れぬのを侮った。侮るといふのは妥当でないかも知れぬが、「兄はおめでたい」とは確かに思つていた』
『こんな風に性癖の相違があつても、博士と弟とは喧嘩というほどの喧嘩をしたことがない。それは弟が兄を凌ぐことがあつても、兄は笑つており、後には弟が後悔したからである。二人の次に生まれた妹は、嫡男の博士そっくりの女で、博士とは何事につけても諧和し、「小さい兄さん」の篤次郎を抑制するようにしていた。喜美子の次に潤三郎が生まれた。潤三郎に「蘭外森林太郎」の著があり、「紅葉山文庫の研究」がある。

『博士が十六歳の時、父が千住に出来た「区医出張所管理」という役を、東京府庁から言い付けられた。これは父

が旧藩主の診察をするかたわら、向島で開業していて、医師集会の世話などをしたからである。そうなのは、これも博士の母の内助によつたのである。父は茶を立てている時、病家から呼びに来ると断わろうとする。母がその時無理に手に持った柄杓を置かせ、衣類を改めさせて出してやる。そんな風で、父は勤勉家の名を得て、府庁の抜擢を蒙つた。この千住の勤めが、森家の内証をよくした根元である。なぜと言うに、翌年になって、父は「南足立郡郡医を命ず」という辞令を受けて、年給二百四十円をもらふことになった。これは当時から見ても、非常な薄給で、旧藩主から受ける報酬を合せても、月に三十五円にしかならない。しかし十五円から三十五円になったのは大きい差である。それのみではない。郡医に施療ということがある。これは府庁が貧民に施療券というものを分配する。それを持って郡医の所に来ると、郡医が診察をして薬をやる、郡医はその薬代を府庁から受け取るのである。博士の父の医术は間もなく大評判になって、病人が非常に多く集まつた。父は書生を三人置いても手廻らぬほどで、後には遠方の病人のために、金町に出張所を設けた。こうなると父も勢い、茶なんぞ立ててはいられない。背後には母がいて奨めたり励ましたりして、巧みに舵を取っているのである。府庁で受け取った金から、書生や抱え車夫の給料、薬店の払いを差し引いた残りは、勿論大した金高ではないが、それが塵の積もるように殖えて、森家の貯金は見ると二倍になり、三倍になった。

《博士の父が千住の診察に手を着け始めた時、博士は大学の予科に入って四年目になっていた。博士は予科に入るには年齢が足らなかつたが、当時は戸籍法が今ほど嚴重でなかつたので、年を増すことができたのである。篤次郎と妹とはまだ小学校にいた》

《博士は二十歳で大学を卒業した。その翌年には篤次郎が十六歳で大学の予科に入った。中一年置いて、博士は官費で洋行した》

《博士の卒業する一年前に、父は家をあげて千住に移つて、旧藩邸へは日をきめて通うことにした。それから博士の洋行した翌年に、父は旧藩主の臨終を見届けた上、暇をもらつて、千住の方へ全力を尽すことにした。千住では間もなく郡医を辞し、並の開業医になったが、病人の来ることも減ぜず、収入も格別へらなかつた》

《博士は二十七歳で西洋から帰つて、その年に十九歳になる妹が大学教授何がしの所へ嫁に行つた。中一年置いて、篤次郎が二十四歳で大学を卒業して、蠣殻町に開業した。また中一年置いて博士三十一歳で、今住んでいる千駄木町の家に父と同居した》喜美子が嫁に行つた大学教授何がしは、小金井良精博士であつた。

《このころ森家の経済は博士の母が一人で取りまかなつていて、貯金が四千円あつた。これは博士が十六歳から三十一歳になるまで、十六年間父が千住で稼いだ金で、千駄木町の家屋敷もその中で買ったのである。博士は大学を卒業してすぐに官吏にはなつたが、このころまでなかなか貯金

をするなどという余裕はなく、反対に時々補助を千住に仰いでいた。」

III

記述が前後するが、ドイツに留学した先生は、上司の命令で陸軍衛生学を専攻された。明治二十一年（二十七歳にて）帰朝。陸軍医学舎（後の軍医学校）の教官に補せられた。

先生の次の次の軍医総監、山田弘倫博士の著「軍医としての鷗外先生」によると、明治二十二年（二十八歳）の条に、「三月、陸軍軍医学校編纂部から、陸軍一等軍医、医学博士森林太郎撰として、「陸軍衛生教程」が出版された。これは陸軍の軍医はほとんど皆座右に備えて金科玉条としたものである」とあるが、森潤三郎によると、明治二十四年（先生三十歳）の条に、「八月二十四日、医学博士の学位を授けられる」とある。どっちが正しいのか私には分からない。

ついでに書いてしまえば、明治四十二年（四十八歳の）七月に、文学博士の学位を授与された。先生が軍医総監、陸軍省医務局長に補せられたのは、明治四十年（四十六歳の）十一月であった。それまでは第一師団の軍医部長だった。

話はまた前後するが、二十七歳で帰朝された先生は、翌年、雑誌「しがらみ草紙」を創刊して文壇に活躍を開始されると同時に、「東京医事新誌」「衛生新誌」「医事新論」

などに執筆して、新しい専門知識の普及に力を注がれた。この時代の先生は、文学と医学との両面にわたって日本にないものを西洋から移入しようとして、福沢諭吉のしたように独力で三面六臂の啓蒙運動に情熱を燃やしたのだ。医学の方のことは知らないが、文学の方ではヨーロッパの新らしい小説を次々と翻訳した。日本に初めて美学を紹介した。先生自身「舞姫」「うたかたの記」「文づかい」などの新鮮な短篇を書いて発表した。詩の翻訳もされた。新しい絵画についても、意見を述べられた。「即興詩人」に恍惚としたことは前に書いた。「埋れ木」のゲザの姿も忘れたい。

トルストイ、ツルゲーネフ、モーパッサン、ドレーダー、などが文壇で云々され始めたのは、明治四十年前後だったと思う。ところが、明治二十五年に出た先生の「水沫集」



「しがらみ草紙」表紙
（落合直文筆）と左は
小金井喜美子



には、そういう作者の翻訳がはいっているのだ。

そのくらいだから、先生の創作も、紅葉や露伴の小説などとは種類の違った新鮮なものだった。ハイカラで、人生に触れていて、新しい抒情が全篇を包んでいた。それまでの日本の小説が古めかしく色褪せて見えた。

だから、たちまち先生の文学が文壇を席捲したのも無理はない。樋口一葉の「日記」を読むと、彼女の「たけくらべ」を激賞した「しがらみ草紙」を持って慌ただしく一葉を訪問した上田敏と戸川秋骨とが、その一文を読み上げるところがある。原文は忘れたが、「今、文壇の王と言われる鴈外漁史が」云々という一節のあったのを覚えている。それほど、鴈外の一言がそんなに文壇で重んじられていたのだ。先生の蘊蓄と才能とが一時に花開いたのである。これより前、先生は二十八歳の時、西周の媒妁で海軍中将赤松則良の長女登志子と結婚している。年の数え方はすべて数え年である。

この結婚の事情はよく分からない。先生自身も書いていないし、先生のことには細大洩らさず書いている小金井喜美子もこのことには触れていない。だから何も分からないが、親類の出世頭でもあり、一種の恩人でもある西の持つて来た話なので断わり切れなかったのだろう。当時先生は二等軍医正であった。私は二等軍医正が中尉相当官か、大尉相当官か知らないが、相手は何と言っても海軍中将だ。先生はともかくも、両親は良縁と思ったのではないだろうか。

上野花園町に、赤松家の貸家があった。それまで先生は千住の家を出て、篤次郎と潤三郎とともに下谷の根岸に貸家住まいをしていた。《兵食試験の仕事が忙しくなったのと、次兄が大学に通い、私が中学に入るようになったので、千住からでは通学に不便なためであった》潤三郎がそう書いている。結婚すると同時に、先生は根岸を引き払って下の弟だけを連れて赤松家の持ち家へ引っ越された。《花園町へ移られてからは家の様子がスッカリ変わって賑やかになりました》と喜美子が書いている。登志子の妹が二人と、赤松家に永年仕えていた老女と、下働きが二人、これだけ付いて来た。この老女が、これまでの赤松家のシキタリ通り、先生を殿さま、父親を大殿さま、篤次郎のことを若殿さまと呼んだ。

当時の先生は昼は軍人だが、夜は文士だった。友達の手士が大勢尋ねて来ては、夜遅くまで話し込んで行く。客が何時ですかと聞いたなら、家人がもう十二時ですと答えた。先生の神経は、まだ十二時ですと答えてもらいたかった。そういう小さな齟齬もあったろう。しかし、確かな不縁の原因は知るに由ない。翌年の十月には、先生は弟を連れてさっさと家を出て本郷駒込千駄木町五十七番地に借家している。

この家には後に漱石先生が住み、「吾輩は猫である」を書いた。今は愛知県犬山の明治村に移築されている。

当時の先生の活躍については、田山花袋が次のように書いている。《ほとんど人間業とは思われなかった。議論ら